

デジタルアーカイブの連携に関する実務者協議会(第7回) 議事概要

日時：平成29年1月26日(木) 10:00～11:45

場所：中央合同庁舎4号館 共用1202会議室

【議事】

1. 日本型「ナショナルなデジタルアーカイブ」についての検討
2. 本協議会の最終報告書の作成について
～(仮題)「我が国におけるデジタルアーカイブ推進の方向性(素案)」
3. メタデータのオープン化等検討WGでの検討を踏まえたガイドラインの作成について
～(仮題)「デジタルアーカイブの発信・利活用基盤ガイドライン(素案)」

【概要】

1. 日本型「ナショナルなデジタルアーカイブ」についての検討
 - 高野座長より本議題を設定した趣旨などについて説明。続いて、事務局より資料1に基づき説明。
 - 質疑の内容は、以下の通り。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・良い提案だったと思う。ビッグピクチャーが欲しいと考えていた。デジタルアーカイブのインフラから利用者まで俯瞰したものが必要である。
- ・資料にもある長期のデータの保存ということでは、全体で共通化されるべきところ、利用者に近いところなど色々ある。
- ・例えば、文化遺産として山・鉾・屋台行事等が認められたが、これらをデジタル化してデジタルアーカイブとして使おうとした場合、何をデジタル化して何を残すか、アクセスするためにはどうするのか、といった話がビッグピクチャーになっていく。
- ・そのベースをこの図の中に入れていきたいが、一つの図で表すのが理想だが難しい。
- ・まずは、どのようなプレーヤーがいて、どのような機能があるのかといったことを整理していくことが必要である。

(高野座長)

- ・機能別やプレーヤー別、データの流れ別では変わってくる。自館の業務ために必要

な目録と公開の目録は分量が変わってくる。

- ・いずれこれら業務用の目録も、共有されて、著作権が切れていなくともその館が OK を出せば公開されていくという形が望ましい。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・全体像は纏まっているが、プレーヤーの役割が分かりにくい。国からの支援も含め、別の図で、各者が何をすべきか明確化すべき。
- ・地方の機関だけでなく、民間もボランティア等大きな役割を果たさなければならない。そこは、全体の動きを示すべき。
- ・そのためにイメージ的なものを作れるとよい。例えば 10 年後に、日本のデジタルアーカイブはこうなって、日常生活はこう変わるというイメージ。授業で使ったり、仕事に使ったり、国民向けのイメージ図が簡単なものでも良い。

(高野座長)

- ・地方や中央など縮尺を変えた図も示せるとよい。機能別・役割別・地域別に、自館がどういう機能を果たすべきか、どのようなサポートが受けられるかを明確にするのがよい。

(東京大学 生貝客員准教授)

- ・資料 1 の図はよく理解できる。あとは、役割分担をこの図中にどう位置づけられるのか。
- ・これまで、アーカイブ機関というものを大きくくりにして捉えてきたが、大規模の機関と小規模あるいは地方機関を明確に分けて、それぞれの役割が整理できるとよい。
- ・発信基盤をある程度国が保障すべき。コンテンツをホストするようなサービスを提供すれば、自分のところだけでは発信するのが難しいという機関がそれを利用して、結果として、利用できるアーカイブが増えていくことになる。
- ・そうしたシステムは、国が単一のものとして設置するという考え方もあるが、あるいは、映画、美術、図書といった分野ごとに発信基盤、公開支援機能を持つとすれば、それがこれまで議論してきたアグリゲーターの担う機能とも位置づけうる。地域ごとの分担ということも考えうる。

(高野座長)

- ・一つの会議体が盛り上がる分野はよいが、それ以外の分野ではアグリゲーションに入らないとデジタルアーカイブの議論に乗れないということではいけない。グッドプラクティスの話を聞いてみると、ポイントは発信の面白さや個性であったりするようなので、その中でデータの互換性等が重要であるとの考えに至った。
- ・個性を生かしていくことが重要である。
- ・Europeana の方の話を聞いたところ、コンテンツの活用のところはうまく回っていないようだ。そのようなモデルを追っても仕方なく、そのようにならないようなモ

デルを考えるべき。

(東京国立近代美術館 水谷室長)

- ・資料1を拝見して思ったこととしては、構造的なチャートは良いが、留意点に海外に後れをとっていると書かれている点について、本当かなと思う。
- ・私の認識では、コンテンツそのものは、良いところまでいっているが発信力が弱い。
- ・海外からくる人に日文研(国際日本文化研究センター)や国文研(国文学研究資料館)のデータベースを紹介するといいいものだと褒められる事も多い。本当に必要なものが届けられていない点が課題であり、国等の支援が必要。
- ・インセンティブについては現場の意見を吸い上げていただき、もう少し丁寧に記述いただきたい。ミュージアムと学芸員の間でも認識に大きな隔りがある。

(高野座長)

- ・遅れているというのは、発信が遅れているということだろう。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・アーカイブに対する評価が不十分なのはそのとおり。アーカイブを構築しても機関の評価につながらないのが問題。活用の部分はヒット数くらいしか見えない。
- ・伊丹市の図書館はLibrary of the Yearを受賞し、7社の新聞で取り上げられた。アーカイブでもそういった評価の仕組みがあると良い。
- ・アーカイブは自分の館に何のメリットがあるのかという意識があり、遠い将来というイメージしかない。外部から評価する枠組みを持った方がよい。民間、国、どこがやるべきか等、色々なやり方はあると思う。

(高野座長)

- ・KPIでの定量的なフィードバックはいると思う。入場者数以外のメトリックスがあってもいい。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・博物館、美術館は、図書館以上に入館者数の評価が重要。講習の中で、入館者数に結びつかないからやりたくないと言われた。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・我が国においては、デジタルコンテンツ自体はそれなりに流通している。しかし、それがまとまって出ていない。発信がうまくないと思う。メディア芸術データベースにも携わっているが、海外の研究者ともつながろうという話がある。日本らしいコンテンツへのアクセス増のため、海外へのアウトリーチをうまくやっていく必要がある。
- ・デジタルアーカイブは社会のイメージはできているが、高野座長からの提案はこれ

をブレイクしてみようという取り組みに見える。

- ・オープンデータ、オープンサイエンス、デジタル・ヒューマニティーズなどの話とつないでいくことによって価値を高めるという意味が出てくれば、ビッグピクチャーとしてわかりやすい。
- ・さらに、プリザベーションとしての時間軸も含めてやっていこうとすると国レベルの安定した基盤が必要になる。

(高野座長)

- ・キャッチフレーズは異なるがつなぐことで価値が生まれるということ。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・図書館や美術館にとって 30 年というのは短い期間。それを越えるという意識が必要。

(高野座長)

- ・放送コンテンツについて、海外アーカイブなど現状を含めて課題を教えてほしい。

(放送番組センター 鈴木事務局長)

- ・国際テレビアーカイブ連盟 (FIAT) には、NHK だけが加盟していて、民放局はほとんど関わりがない。放送番組センターとしては、加盟はしているが、会議には出ていない。
- ・海外は法的な整備状況が異なる。海外は、公的なアーカイブでは権利処理が不要、複製権が及ばないとなっている。だが、日本では複製権を処理して公開することが前提となっている。海外のように、複製が適法に行われ、施設内無償公開の場合は権利が及ばないという理屈は通用しない。ネットで外に出そうとすると、たとえ無償であっても公衆送信権の処理がさらに必要となる。公開範囲が非常に限定的になる。
- ・放送コンテンツの特殊性への理解が必要。他の文化財と同列には扱えない。放送コンテンツの固有の事情を分析した上での議論が必要。その点を考慮せずに、放送コンテンツの取り組みが遅れていると言われると困惑する。

(高野座長)

- ・私もテレビの CM などの広告アーカイブにも関わっているが、肖像権などで難しい部分があり、そのような状況であることは把握している。

(国立国会図書館 川鍋副部長)

- ・束ね役の評価やインセンティブのところを残しておけないか。
- ・国立国会図書館は、ジャパンサーチの取組みを進めているところであるが、個別の機関とそれぞれ連携するのは難しい。各分野や地域のコミュニティの協力が束ね役

の機能には欠かせない。

- ・ 束ね役が評価・インセンティブをもって取り組める書きぶりとしてほしい。

(国立国会図書館 徳原補佐)

- ・ 国の共通プラットフォームの構築はどこがやることになるか。

(高野座長)

- ・ 国の共通プラットフォームについては、すぐには書き込めないが、一つでなく、複数かもしれない。それが束ね役ということかもしれない。
- ・ 個々の発信を助ける黒子として各組織、参加館が世界標準を意識したボトムアップの取組を行うことが理想的と考えている。そこがうまくいかないところは国会図書館などが助ければよいとの考えである。
- ・ 今回、二階層のものを示したのは、文化遺産オンラインを参考にしている。文化遺産オンラインは、バックエンドで公開を支援する機能を持っており、ここを 100 館ほどが利用しており、郵政博物館などはここをうまく使って発信している。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・ 二階層のレイヤー構造という話だが、クラウドで考えるともう少しレイヤーがいろいろあり複雑ではないか。
- ・ 機能的にどのようなレイヤーがあるか分析することは大切である。レイヤーにインフラを提供する者、サービスを提供する者と、機能を分けて考えることを整理していかないと次のステップの話に進んでいかない。

(東京大学 生貝客員准教授)

- ・ 資料 1 の 2 ページ目ほどに、各機関が無料で参加できる共通プラットフォームや、そこへの参加にあたってメタデータの標準化やデータ提供のルール遵守を条件するという考え方が示されている。これは重要。
- ・ Europeana では Europeana Data Exchange Agreement に基づき、メタデータの権利放棄やコンテンツ・プレビューの著作権表示などを共通ルール化している。Europeana という共通のプラットフォームにデータを提供するときには、そうしたルールが適用されるような仕組みになっている。
- ・ メタデータ WG でも、望ましい標準、デジタルアーカイブが満たすべき基準について議論をしており、本会でも次回議論になるだろう。
- ・ プラットフォームの利用拡大を通じて徐々に望ましい標準を広げていくことが重要。再利用や権利表示など、さまざまな主体がかかわるときに、この部分は共通でやろうということ担保する必要がある。その意味において、この資料の記述には納得できる。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・アーカイブを一機関で全てというやり方は、Europeana も含めて難しいと思う。束ね役を含め、色々なフェーズがあり、それぞれで役割がある。一つのポータルで集中して使うのも必要だが、フェーズ毎、拠点ごとに束ね役は必要で、その方が働きかけがしやすい。例えば、国の機関に地方が入るにも障壁がある。その意味で、色々組み合わせがあった方がよい。
- ・日本型のデジタルアーカイブは、集中型というより拠点分散型。機能的、技術的には統合的な検索や、関連するものが表示される仕組みがあった方がよいが、集める段階や働きかけは、色々なところがそれぞれ取り組んだ方がよい。使ってもらうためにも身近なところに活動がなければいけない。

(高野座長)

- ・地域のコミュニティに流してこそそのアーカイブである。

2. 本協議会の最終報告書の作成について

- 事務局より、資料2及び3に基づき説明。
- 質疑の内容は、以下の通り。

(高野座長)

- ・山崎氏からの指摘のあったようにデジタルアーカイブの溶け込んだ新しい社会というものについて冒頭で触れるべきと感じた。
- ・また、杉本氏から指摘のあったように階層図を、機能や中央・地方ごとに、プレイヤーも組み立ていくつかに分けて分かりやすくすべきである。
- ・テクニカルな話は、ガイドラインに整理するとして、報告書では定性的な議論にとどめるのがよいと考えている。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・8ページのメタデータの連携が進められているとの記述があるが、日本国内のリソースに対する認知が進んでいないので、これまで作られたコレクションやコンテンツについても附属資料などで触れられるといいと思う。さらには、そこで文化財以外についても触れることで視野が広がると思う。

(高野座長)

- ・私の関与しているところで、文部科学省の官房政策課に関わっていただいた学術系のデータベースもここでの議論が繋がらないという問題がある。
- ・本協議会でも話をしてもらった後藤准教授が関与している、人間文化研究機構の学術系データベースもここでの議論につなげていかないといけない。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・デジタルアーカイブしかスコープにしないということにはしない方がよい。
- ・オフラインのコンテンツでもメタデータを出すことで、ここまで来てもらえれば見られるということが分かるよう、存在を知らせることが重要である。
- ・電子的にメタデータレベルで提供できることが大切である。

(高野座長)

- ・コンテンツは提供することが全てではなく、コレクションがこれだけあるよ、という電子的に記録されている情報も含めて、デジタルアセットがどのくらいあるのかを示せると良い。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・海外と比べ進んでいないと書かれているが、進んでいる部分とそうでない部分がある。もっと踏み込んで書いた方がよい。進んでない分野は連携、利活用。
- ・デジタル化はされているが公開されていないことも多い。デジタルアーカイブとは何か。デジタル化されたものなのか、メタデータを付けて検索できるようにしたものなのか、広く公開できる仕組みをもっているものなのか。デジタル化にもフェーズがたくさんある。

(高野座長)

- ・どの部分がよくできていて、どこが不足しているのかを示せるとよい。コストエフェクティブであると良い。

(東京国立近代美術館 水谷室長)

- ・ミュージアムの評価の指標として来館者数というのがある。
- ・図書館の資料は貸し出しでもネットで見ても価値が変わらない。だが、ミュージアムは館（やかた）の中で見る体験とデジタルアーカイブで見るとは価値が全く違う。図書館とミュージアムは価値が異なることを前提とした上で、ミュージアムがデジタルアーカイブに入るインセンティブをもう一度考えたい。
- ・ミュージアムでは館の中で見るのが第一の価値、すなわち館の壁は高い。デジタルアーカイブの役割としては、館内の人間に対するサポートがメインとなる。ここは図書館と異なる。
- ・そのような美術館が、デジタルアーカイブを整えるときに、著作権法の問題があるが、資料3の13ページで示されているサムネイル・プレビューの課題が示されているがこれは、館の外の話である。
- ・文化庁著作権課の話では、館の中での利用についても、許諾をとらず館内でタブレットやスマートフォンが利用できるということの法整備が進められている。これは、美術館にとって大きなインセンティブになるものであったので、それも書き込んでいただきたい。
- ・館内でPDFが自由に使えるのは美術館の展覧会の鑑賞の手助けになる。これは、美

術館の展覧会カタログを巡る議論と非常に近い。是非この議論についても明記いただきたい。

(高野座長)

- ・50年後には、紙の目録が例外になり、館の内外で展覧会のデジタルカタログが使われるようになる。有料で売買され、学校の授業でも使われるようになる。もちろん現物の体験はすばらしく、その経験がすばらしいほど、館外にファインダビリティを高めてもらうことにつながる意義が増す。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・美術館が展示をする際にそこにおいているものに何の情報を加えるかに本当の価値がある。
- ・展示会をする際に、資料を集めるが、その集めるということに価値がある。デジタルでは、それがすぐにでき、リッチなものができる。
- ・例えば祭りを博物館には入れられないが、ヴァーチャルにはできる。そこに価値が生じる。

(高野座長)

- ・よく Europeana が自慢するのが、オランダの国立美術館であるライクスミュージアムがほぼ全作品について制限をかけずコンテンツを高精細画像で出していることでそれが広く利活用につながっていることである。
- ・しかし、それらのコンテンツを一番利活用しているのは、ライクスミュージアム自身である。具体的には、館内の展示物を紹介するパネルなどにデジタルアーカイブを活用している。すなわち、館内のインフラとして活用がされている。
- ・水谷氏御指摘のように、デジタルアーカイブは美術館の展示の仕方などを変えていくことになるが、それは先駆的な事例が引っ張ることになる。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・報告書案 13 ページの人材育成は重要で、4つ目の教育分野について、もう少したくさん書いた方がよい。美術館、博物館は学校利用が多い。「教育の現場」は学校とは限らないが、MLA 機関にとって学校はある意味良いお客さんで、力も入れている。各機関が実際に子供たちのデジタルアーカイブの活用に役立てていけるようなイメージが書けたらよい。
- ・最後の「デジタルアーカイブの事業を実施できたりする」の主語は何か。

(国立国会図書館 徳原補佐)

- ・特に主体に限定はないと思う。
- ・今後のイメージについてお聞きしたい。例えば、美術館でいうと、展示についてデジタルにより見栄えをよくすること等のほかに、アーカイブの活用には、経済活性

化やイノベーション創出等につながることもあると思う。その具体的な提案をいただけるとありがたい。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・全てをイメージするのは難しい。利用者側の視点として、一つの家族がアーカイブにどう関わるか、日常の姿が将来像としてあると良い。学校教育の現場でのアクティブラーニング、父親が仕事で役立つデータベースが提供されているイメージとか、利用者の部分に当てた文章があると良い。
- ・各機関、行政機関向けという意味もあるが、国民に向けて示したい。全てというわけではないが、例えば一家族の視点で書かれていると良い。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・すべてがデジタルではないが、せんだいメディアテークの「どこコレ」という取り組みなどは例として良いと思う。
- ・少し変わるが、大英博物館では、来る前にこれを見てといったものをデジタルで提示している。デジタルアーカイブと観光を結び付けるシナリオを作ることができる。

(高野座長)

- ・“The value of Europeana” という報告書で、外部のシンクタンクが Europeana を観光などでどのくらい価値を生んでいるかということのを換算し、評価している。
- ・例えば、メトロポリタン美術館などで光琳の作品に感動した外国人が、日本のどこに行けば、光琳の他の作品が見られるのかを示すことによって、1日の観光プランが変わり、観光につなげるシナリオがあるとよい。

(東京大学 生貝客員准教授)

- ・評価について、Europeana は定量評価の軸として、広く利用されている web サービスにおいて、そのアーカイブのコンテンツがいかに使われているかが重視されている。たとえば、インターネットで何かを調べたりするとき、多く人は Wikipedia や SNS のサービスなどを利用している。このとき、そうしたサービスにおいて、ファクトに関する情報が、信頼のある公的なものが利用されているということが、知識インフラ整備という意味で重要。
- ・国会図書館のデジタルコレクションの利活用用途として、Wikipedia でソースとされていることが大変重要だと感じている。Wikipedia は記述について外部のソースを求める主義であるが、そのためにデジタルコレクションの直接リンクが使われている。
- ・ネットは相互関係が強い情報流通のエコシステムができている。国民が広く使っている web サービスとの連携という評価軸が非常に重要。

(高野座長)

- ・国立博物館では大々的にデジタルコンテンツの提供件数を増やして、権利を理想的な形で整理し、発信することを始めた。また、国立美術館のゲートウェイの話もある。報告書では、そのような取り組みを書き込めると良い。

3. メタデータのオープン化等検討 WG での検討を踏まえたガイドラインの作成について

- 事務局より、資料4に基づき説明。
- 質疑の内容は、以下の通り。

(高野座長)

- ・テクニカルな事項は、分野ごとに異なるので、羅列しても意味はない。親会の報告書に合わせて、各レイヤーに参加するときに必要なことを書く予定。まとめ方や方針、アイデアがあればお願いしたい。

(東京国立近代美術館 水谷室長)

- ・メタデータのオープン化に関するガイドラインは重要であるが、ガイドラインの内容について日本博物館協会と連携してほしい。
- ・というのも、2019年に京都で開催される ICOM (ミュージアムの国際会議) で情報発信に関する目標が盛り込まれる可能性がある。その内容とすり合わせてほしい。
- ・日本博物館協会の動きは大きいし、ここが知らないというのは問題が大きい。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・以前関わった取り組みでは、力のないミュージアムは管理簿を電子化できないという話があった。その状況はあまり変わっていないので、そのあたりを元気づけるような報告にしてほしい。ハードルが高くなるとかえってマイナスになる。
- ・いろんなところでガイドラインを使おうとすると具体的に書けなくなるところもあると思う。ここで作るのは総合的にならざるを得ないと思うが、自分たちの組織で使えるよう具体的なものについても継続的に議論していけるとよい。
- ・デジタルならウェブで面白いことができる。Wikipedia もそう。そのためには、公開に当たって LOD への配慮があるのでそのあたりについても記述してほしい。

(高野座長)

- ・ワーキンググループには、そのあたりの専門家を呼んで議論をした。
- ・オープンデータのデバイスとなるよう、例えば画像ビジネスにこだわって、大きな活用を逃さないよう促していきたい。そのための具体的なガイドラインとしていきたい。
- ・震災アーカイブのガイドラインは、震災アーカイブを作るための細かい技術的なことを記述してきたが、今回のガイドラインはもう少し、一般的な形のガイドライン

にし、国としてデジタルアーカイブを育てていくガイドラインにしたいと考えている。

- ・ガイドラインの名前は、メタデータの話に限ったものではなく、デジタルアーカイブを育てるという意味で、このようにした。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・ガイドラインの読み手を書いた方がよい。ある程度下のレベルで説明がないといけない。中には理解できなくて怒り出す人もいる。単語の説明等、多少丁寧すぎる方がよい。
- ・こうしなければいけないというよりは、選択できる部分があるとよい。ベスト、ベター、基本的なものとのフェーズが分かれていると、受け取る側としては受けとめやすい。

(高野座長)

- ・ワーキンググループのメンバーと調整をしていきたい。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・取り組む対象として、MLA 機関や国の機関が中心に議論してきたが、もう少し一般市民の団体にフェーズを当てる部分があってもよい。将来的に、行政や国の機関だけで全てをやっていくのでは不足で、様々な民間団体、民間企業も含めてやっていかなければならない。そこに何ができるのか、もう少し記載があるとよい。

(高野座長)

- ・民間団体や企業を支援する活動は重要である。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・中間に当たる存在として、商工会、観光協会等、行政でも民間でもないところがある。そういったところは多分、観光に関する団体ならば観光ポータルを作ったり、勝手にアーカイブをやっているのだと思う。そういったところと一緒にできれば、それらが発信するものを世の中に示すことができる。その辺りも追加して記載するとよい。

(高野座長)

- ・オリパラでも、東京都がご指摘のような活動をしていると認識している。
- ・単発でお金をかけて良いものを作っても、すぐ消えることが多い。利活用のレイヤーでは、一般企業や民間団体の取組が容易になるようにすることが必要である。

4. JAL2016 公開ワークショップの紹介

○水谷構成員より、参考資料1に基づき説明。

5. その他

○次回会合は、3月8日16時から開催する。場所については、調整の上、追って連絡する。

以上